

ケニアの未来づくりの現場から
JICAプロジェクトレポート in Kenya vol.1

皆さんの手で、
道を作って
ください。

現地で入手可！ 「土のう」で自分たちの道をつくる。

文●鬼内秀起
(スマイル アフリカ プロジェクト・プロジェクト室長)

東アフリカ・ケニア共和国の内陸部に位置する肥沃な農業地帯、トランゾイア県。“Google Earth”でこの地表を確認すると、緑と茶色の芸術的な農地のパッチワークが現れた。

我々はソトコト サファリマラソンの終了後、首都ナイロビから空路エルドレット（ナイロビから約300キロ内陸に位置）へ向かった。JICAがケニア政府の要請に基づき推進している農業プロジェクト、「SHEP」を視察するためだ。「SHEP=Smallholder Horticulture Empowerment Project」とは「小規模園芸農民組織強化計画」のことで、ケニアでも有望な「園芸農業（穀物以外の野菜・果物・花卉など）」分野にて、①利益を出し



土のう工法の専門家、福林良典氏（工学博士）。このバケツで土を計量し、土のう袋に詰める。



土を入れた土のう袋をオリジナル木枠で整形、泥や土を除去した道に敷設していく。

ている一部（2%）の大規模農家ではなく、そのほとんどを占める小規模農民の収入増を目指し、②販売や流通経路を整備・開拓、各種研修実施、道路インフラ整備、生産技術の指導により、③農民が自主運営できる仕組みづくりを行うものだ。その仕組みが広がることで、ケニア全体の農業生産力増と経済力強化に結びついていく。これが「SHEP」の最終目的であると認識。

エルドレットの街からトランゾイアエリアへ車で2時間、まずは

「土のう」による道路整備のデモンストレーション見学のために、ルリエ・イヌカ（地区・グループ）へ。印象深かったのは、①作業に女性が多く参加し（中年女性が活躍）、②デモンストレーションや実地研修がケニア人によってしっかり運営されていること、③ケニア人の各担当はしっかり皆の前でしゃべり、質疑応答する（ケニア人はもしかしてスピーチ好きかも？）、④高いモチベーションと自主性によって作業は進められている、⑤日本人専門家はケニア人の自主性を重要視しておりバックアップに徹している、ことだった。

現地調達可能な素材を使い、ケニア人自らの手により協同で進められる作業を見て、このプロジェ



でこぼこの道が、土のう工法で見事に復活。「福林ロード」と命名された。

アフリカの子どもへ日本からシューズを贈る「スマイル アフリカ プロジェクト」。このプロジェクトは、国際協力機構（JICA）の協力を得て行われている。では、JICA自体が行っている国際協力プロジェクトはどんな内容なのか。ケニアの現地からレポートします。



ジョセフさん（右）とティバタさん。「どうしてそんなに一生懸命に作業するんですか？」と尋ねると、「道がよくなると、（トラックが揺れないので）卵も破損せず、野菜も傷まず、収入が増えるから」と即答。

クトは成功していると確信。土のう工法の専門家である福林良典氏は、「いつか日本の技術協力から卒業する国が、アフリカから出てきてほしい」と望んでいる。

日本でも昔から災害被害を軽減するために使われてきた「土のう」。この土のうが、その強度や素材の調達しやすさにより、ここケニアの農村でも普及している様子を確認。現地でも「Do-mat」と呼ばれていて、不思議な気分



ALI ATTAS'S SOUTH AFRICA REPORT

アリ・アタッスの LET'S GO TO 南アフリカ！

Vol.24

ズールーの伝統的音楽を聴くなら！

南アフリカで開催された FIFA コンフェデレーションズカップ 2009 は、来年にやって来るビッグイベント、ワールドカップのよき食前酒として、世界の人々に南アフリカの大地の熱狂を見せることができた。

来夏、自然やロハスに関心が高い人々にも、世界が注目するこのイベントは見逃せないものになる。

先のコンフェデ杯の準決勝で、ブラジルが南アフリカを破ったとき、私は来年、この地を訪れる人々が楽しめる文化的な体験について

まで考えることはできなかった。大人から子どもまで、音楽とラップ、歓喜の最中に体験できること。南アフリカはさまざまな体験を提供してくれる。しかし、それを総体的に語るにはあまりに大きすぎる国だ。そこで、私の個人的な視点で語らせてもらおう。

クワマシュは、港町ダーバンの中でも、古く、大きな街区だ。1958 年、インド人街区のカー・マナーから大勢のアフリカ人がここに入植した。

そして、ここはアートが活発な

地でもある。街中では、伝統的なマスカンディ音楽のライブを聴くことができる。

マスカンディはズールー族の伝統的音楽であり、ズールー族の文化と深くつながっている。これは、長く続いたアパルトヘイトと闘うものだった。彼らは、クワマシュの歴史の中で、社会的に不当な扱いを受けていたことをダイナミックなアートを通じて訴える。

そして、クワマシュでは、アフリカ現代ダンスもあなたに興奮を与えてくれるはずだ。



illustration by Mio Yamashita

本誌「ラジオ・ソトコト」でおなじみの。日本にアフリカンカルチャーを介するアリさんに、これからイチャイチャ南アフリカの情報を伝えてもらいます。